

会観」と相即不離です。私たちは、これまでのカリキュラムの編成に関するとりくみの蓄積を活かし、子どもが民主的な主体として育つことに重点を置くべきです。さらに、そのために各現場・各教職員こそが、一人ひとりの子どもの育ちに関して主体的に考え、議論し続けることの重要性を主張していく必要があります。

そもそも、「資質・能力」を中心とする教育課程への転換は、断片的な知識の暗記を中心とする教育・学習から脱却し、子ども・若者たちが現実生活の様々な場面で出会う問題を主体的・協同的に解決していける力の育成に資する教育をめざすことを意味します。この点に一定の意義は認められますが、こうした教育には教育内容の現場における主体的な精選が不可欠であることも継続的に訴えていくべきです。

#### ● PDCA サイクルの厳格化よりも、目の前の子どもの実態に則したカリキュラムの編成をめざしましょう。

「カリキュラム・マネジメント」の推進論においては、育てるべき「資質・能力」＝育てようとする子ども像の明確化、その実現に向けた教科・領域横断的な学校全体でのとりくみ、および、このとりくみに関するPDCA サイクル確立の重要性が謳われています。しかし、私たちはカリキュラム・マネジメントという言葉を用いずとも、カリキュラムの編成において、各現場で目の前の子どもたち一人ひとりの課題を意識しながら、その成長に資するカリキュラムを計画・実践し、子どもたちの姿にもとづいて実践を振り返り、次の実践にその振り返りを活かしてきたという意味で、それは全国教研に見られる発表事例においてすでに実現されてきています。

他方で、「資質・能力」論に関しては、それを明確化し共通理解をはかっていくこと以上に様々な視点の違いをつきあわせながら議論を重ねていくということの方が大切です。PDCA サイクルの厳格化が強調されると、それが現場の主体的な発想力を奪う文書主義や管理主義（一人ひとりの子どものゆたかな学びを創造するための実践よりも、むしろ形式主義的な文書作成とそうした文書にもとづく「監査文化」の蔓延）に墮する危険性があるという点を、私たちは広く訴えていきましょう。

#### ● 各学校現場・各教職員による主体的な授業実践へ

文科省は、最終的にアクティブ・ラーニングという用語の使用を取りやめ、その内実の表現も「主体的・協働的な学び」から「主体的・対話的で深い学び」へと変更しました。そもそも、アクティブ・ラーニングは、表現が余りにもあいまいで、